

世界の軍事博物館と記念艦(1)

——事実を正確に再現・米と西欧——

平間 洋一

私の外国の見方

私は外国を訪問すると、まず最初に訪問した都市の地図を買い、その都市にどのような歴史的記念碑があるか、道路や広場にどのような名前、特にどのような政治家や軍人の名前が付けられているかを探すことにしている。

街路や広場に付けられた歴史上の人物の名前から、その国の歴史を動かした人物に対する敬意や愛着を通して、その国の歴史に対する価値観が判断できるからである。

次いで必ず軍事博物館と記念艦を訪れることにしているが、それは、軍事博物館の展示品や展示要領などからその国の歴史観、自国の歴史に対する評価や、外交姿勢などが理解できるからである。

この観点から私が最も強い印象を受けたのがフィンランド訪問であった。フィンランドの首都のヘルシンキを貫く大通りには、独立戦争、ソ芬戦争と2回もソ連と戦ったフィンランドの英雄マンネルハイム将軍の名前が付けられていた。

さらに同将軍の銅像が国会議事堂

正面に、あたかも国会に外国の干渉が行われるのを守るかのよう、国会議事堂を背にして立っていた。さらに首都ヘルシンキにある軍事博物館には、「ソ連の傀儡政権」と日本の総理が失言するほどソ連の影響下にあった時であったが、フィンランド国民がソ連軍の進攻に対して、いかに勇敢に戦いソ連軍にいかにも多くの犠牲を与えたかを、全館の3分の1を使って堂々と展示していた。

各国の記念艦

次いで私が訪問国の記念艦を訪れるのは、記念艦を通じて、その国における海軍の地位や、海軍に対する国民の敬愛の情が理解できるからである。

このようなことから、私は幸いにも、今回「三笠」が受賞したと同じ国際海事遺産賞 (International Maritime Heritage 賞) の受賞艦

であるスウェーデンの「ワサ」（一六二七年建造）、デンマークの「ジイランド」（一八六〇年建造）、イギリスの「ウォーリア」（一八六〇年建造）と「マリーローズ」（一五一〇年建造）、アメリカの「コンスタチューション」（一七九七年建造）の5隻と、「ヴィクトリー」やドイツ、フィンランドの潜水艦など多くの記念艦を訪れているので、これら記念艦とそれに付随する海軍あるいは軍事博物館の見学を通じて得た感想を書いてみたい。

西欧の軍事博物館と記念艦

社会（共産）主義国家の軍事博物館や記念艦は、社会主義国家イズムに彩られているのに比べ、西欧のそれらは事実を正確に再現しているところに大きな相違がある。

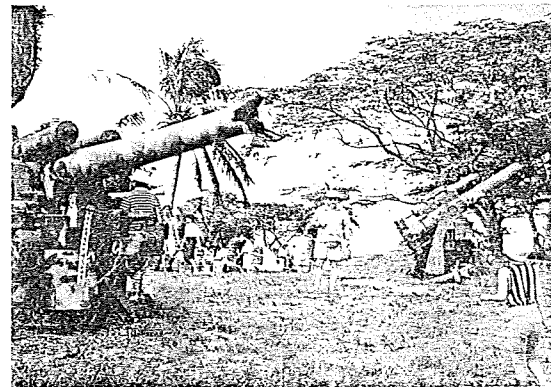
○アメリカ・グアムの博物館

国土が広いアメリカでは、戦場全

体をいかに忠実に保存するかに大きな努力がなされていた。すなわち、日本人新婚旅行のメッカの一つグアムには、アメリカ政府内務省観光局（ハワイの戦艦「アリゾナ」も内務



グアムの太平洋戦争軍事博物館と国立歴史公園

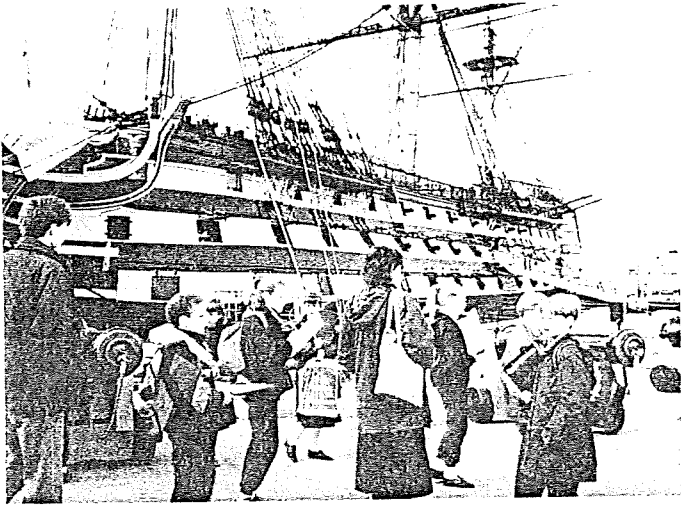


省観光局の管理）が管理する軍事博物館があり、第二次大戦時の日米の資料を展示して激戦の実情を忠実に再現していたが、さらに驚いたことは日本軍の陣地であったところや、

イギリス「ヴィクトリー」

先生に引率され

見学に来た小学生



激しい戦闘のあった地域は国立歴史公園に指定され、現状変更には厳しい制約を課して保護し、そのため海水浴場には日本軍に破壊されたアメリカ軍の上陸用舟艇、日本軍の戦車やトーチカの残骸が、そのまま保存され戦闘の激しさを伝えていた。

○イギリスの「ヴィクトリー」

イギリスのポーツマス軍港にある「ヴィクトリー」などは、あまりにも忠実に復元したため、甲板には凹凸や突起物が多く、そのうえ天井は低く、採光も悪くて見学には不便であり、さらに危険でさえあった。また、説明も当時は食料も貧しく脚気が多発して1ヶ月

に2、3名は死亡していたとか、命令違反者は足を鎖で結ばれ、1か月も2か月も露天甲板にさらされていたとか、ある意味ではイギリス海軍のイメージを壊すような内容、厳しいリンチの実情まで鞭や足枷を示し、隠すことなく説明していた。

なぜ、西欧では史実を忠実に保存展示し、記念艦を忠実に復元するのであろうか。それは戦争の多発するヨーロッパで、敗戦のたびに日本のように反省して展示要領を変えていたら限りがないことによるのであろうか。

しかし、いずれにせよ忠実に復元された「ヴィクトリー」を見ることで、いかに当時の人々が暗い狭い劣悪な環境下で祖国のために義務を果たしてきたかを、また厳しいリンチが命令を徹底させ高い規律と練度を保ち、それが七つの海を制する強い海軍を建設できた遠因であったこと

を暗黙のうちに理解させているのである。

さらにヨーロッパ大陸諸国とイギリスとの相違は、単に武器や戦闘などの軍事面のみならず、この戦争にいかに関民が応じたか、いかに協力したかの国民をも含めたものとなっていることである。

ロンドンの軍事博物館には戦時中の国民生活や、いかに国民が不自由な生活に耐え、いかに戦争に協力して勝利を得たかの視点から展示されていた。

さらに、希望者にはロンドン空襲体験室があり、地下鉄の構内の模型内では爆発音や振動、さらには火薬の臭いまでを含めてロンドン空襲の厳しさを、またどのような食事をして危機を乗り切ったかなど、当時の生活を体験させていた。

一方、記念艦「ヴィクトリー」では「平和な時には神に祈り、戦争と

なったら海軍に祈る」と言われるイギリスだけに、事前に課題でも与えられているのであろうか、多数の小中学生や中学生が（本年3月の訪問時は300から500人はいた）ノート片手に先生に引率されて訪れ、しきりにメモをしていた。（9頁写真参照）

そして案内者（退職した下士官・兵）は、あたかもトラファルガルの海戦の殊勲者のように得意げにイギリス海軍の栄光を語っていた。

国際海事遺産受賞艦

これらの列国の記念艦で注目すべきことは、国際海事遺産賞が造船上の技術的価値および保管状況などによって選考されるにもかかわらず、受賞船舶のすべてが軍艦であるということである。

これは軍艦というものが、常に最新技術の粋を集めたものであったことにもよるが、スウェーデンの「ワ

サ」やイギリスの「マリーローズ」は、いずれも150年から200年間も海底に沈んでいたものを引き揚げたもので、船体は腐食破損し4割から5割しか残っていないので、見方によっては単なる朽木の塊に過ぎない。

これら2隻に比べ「ウォーリア」は一八六〇年に世界最初の帆走と機走両用の戦艦として建造されたが、第一線退役後にホテルシップ、燃料タンクなどとして百余年間使用されたあとスクラップされることになったが、強い保存運動が起こりスクラップ寸前に国民の寄付によって復元されたという。

このように「朽木の塊」や「浮かべる鉄屑」に過ぎない軍艦の復元保存に多くの寄付が集まるということは、諸外国における国民の軍艦に対する、また海軍に対する敬愛がいかに強いかを理解できるであろう。

社会主義国家の軍事博物館

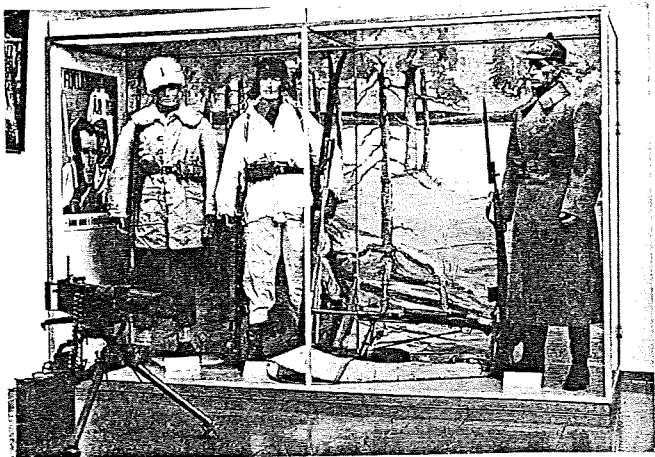
ドレスデンにある旧東

ドイツ軍の軍事博物館を訪れたが、訪れる人もなくソ連製の戦車や大砲を展示していた現代史展示室は、改装工事中との理由で閉鎖されていた。

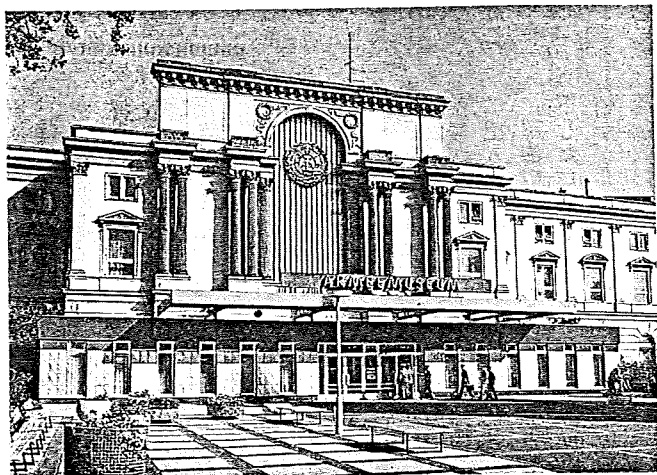
共産主義が崩壊したソ連の革命記念艦「オーロラ」では、見学に訪れた防衛大学生にドル欲しさから「軍帽はいらないか」「勲章を買わないか」と警備兵が言い寄ってきたという。

（つづく）

（防衛大学校教授）



フィンランドの軍事博物館



旧東ドイツ・ドレスデン軍事博物館